

マインドセット理論に基づく行動パターンの学習はDV の予防に効果的か？

研究代表者

筑波大学大学院人間総合科学研究科

古村 健太郎

問題と目的

日本性教育協会（2008, 2013）や内閣府男女参画局（2012）は、恋愛関係において生じるDV、すなわち恋人間暴力の被害を経験したことのある高校生や大学生が少なからず存在することを明らかにした。恋人間暴力の被害は、抑うつ症状の発症と悪化、食欲不振、睡眠障害、不安障害、暴飲、内在化障害など心身の不調と関連することが繰り返し明らかにされている（e.g., Beydoun, Beydoun, Kaufman, Lo, & Zonderman, 2012; Exner-Cortens, Eckenrode, & Rothman, 2012）。これらの背景を踏まえば、効果的な恋人間暴力の予防的介入の開発が急務と考えられる。本研究では、恋人間暴力の予防的介入を提案することを目的とする。

心理的暴力への介入の重要性 恋人間暴力は、大きく三つの暴力に分類される。第一に、身体的暴力である。第二に、心理的暴力である。第三に、性的暴力である。本研究では、心理的暴力の加害経験や被害経験に焦点を当てた介入を行う。その理由は、以下の二点にある。第一の理由は、心理的暴力は身体的暴力へと激化する可能性があるためである。恋人間暴力の多くは、最初から身体的暴力が生じるのではなく、恋人間の葛藤や相互作用において否定的な言動が生じ、その言動が激化していくことで、身体的暴力が生じると考えられ

る（Barthoromew & Cobb, 2010; Finkel & Eckhardt, 2013）。また、心理的暴力の激化と恋人からの支配やコントロールが高い相関関係を示すためである。恋人からの支配やコントロールが生じた恋人間暴力は親密なテロリズム（intimate terrorism）と呼ばれ、恋人間の否定的言動の激化から生じる暴力とは異なる暴力となる（Johnson, 2008）。これらの知見から、恋人間で心理的暴力が生じ始める以前の段階、もしくは、心理的暴力が生じた初期段階で予防的介入を行うことができれば、恋人間暴力の激化を予防することができるであろう。

第二の理由は、心理的暴力が認知されにくいためである。心理的暴力は必ずしも明確に暴力だと理解されるかたちで行われず、また、外傷など目に見える痕跡が残らないため、被害者も第三者も心理的暴力の被害を受けていることに気づきにくい（Arriaga & Cappeza, 2011）。心理的暴力が身体的暴力へと激化していくことを踏まえば、心理的暴力の被害を認知し、予防的行動を取る必要がある。

以上から、心理的暴力への介入は、恋人間暴力の予防的観点から重要であると考えられる。

恋人間暴力の予防的介入 恋人間暴力の予防的介入に関しては、海外において豊富な先行研究が存在する。例えば、学校教育の中で行われる予防教育やインターネットを用いた介入など様々な実

践が行われ、そのエビデンスが蓄積しており (Braithwaite & Fincham, 20014; Ting, 2009), メタ分析も盛んに行われている。一方、国内では、須賀 (2015) が中学生や高校生を対象とした予防教育の実践とその効果検証を行い、一定の成果を報告するなど、予防教育のプログラム開発が行われている。しかし、国内の恋人間暴力の予防的介入の開発は、発展途上にあると考えられる。

これらの介入の多くは、恋人間暴力の予防についての知識形成や恋人間暴力が生じない関係を作るなどの目標形成を行っているが、問題点を指摘することができる。その問題点とは、知識獲得や目標形成だけでは実際の行動が生起しない可能性があるということである。社会心理学や教育心理学の動機づけの研究では、何らかの行動をしようとする目標と目標達成行動の生起の相関は低くなりやすいことが実証的に明らかになっており、形成された目標を行動に移す手段の必要性が論じられている (Gollwitzer & Sheeran, 2006)。この知見や指摘を踏まえれば、恋人間暴力の予防的介入にも、獲得された知識や形成された目標を行動に結びつける手段を導入する必要がある。また、恋愛関係などの親密な関係の研究では、恋人間の相互作用は関係性スキーマとして保存されることで、習慣化し、自動的に生じやすいことが明らかになっている (Baldwin, 1992; Murray & Holmes, 2011)。恋愛関係における相互作用の習慣化や自動化を踏まえれば、恋人間暴力も葛藤の中で生じた否定的言動が相互作用パターンの一つとして習慣化、自動化されていく可能性が考えられる。そのため、恋人間暴力の予防的介入には、習慣化・自動化された相互作用パターンを変容も考慮した介入を検討する必要もある。

予防的介入への実行意図の導入 獲得された知識や形成された目標と行動を結びつける、あるいは、習慣化・自動化された相互作用パターンを変

容する有効な手段として、実行意図の導入が考えられる。実行意図とは、「もしも X ならば、その時は Y をする」という if-then 形式の行動計画であり (Gollwitzer, 2012), 実行意図を形成することで目標が行動と結びつきやすいことが明らかになっている (Gollwitzer & Sheeran, 2006)。また、実行意図の形成は、恋人間の習慣化された相互作用パターンの変容にも効果的であることが明らかになっている。これらの知見を踏まえ、本研究では、実行意図の形成を導入した、恋人間暴力の予防的介入を提案する。

具体的な実行意図の形成手段としては、Oettingen (2012) の mental contrasting with implementation intention (以下、MCII) を採用する。MCII は心的対比 (mental contrasting) と実行意図 (implementation intention) の二つの過程により構成されている。心的対比では、何らかの目標があった場合、その目標が達成されることで生じるポジティブな結果と、現実場面において目標遂行や目標達成を妨害している要因を思い浮かべること、望ましい将来と現実とを対比させる。MCII では、心的対比を行った後、思い浮かべた妨害要因に打ち勝つための実行意図を形成する。すなわち、「もしも妨害要因 X に直面したら、その時は Y をする」という形で行動計画を立てる。このような手順で行われる MCII は、間食の抑制、時間管理、貧困家庭の児童の学習意欲向上など様々な場面において有効性が確認されており (e.g., Duckworth, Kirby, Gollwitzer, Oettingen, 2013), 恋人間暴力の予防的介入にも効果を有することが期待される。

予防的介入への実行意図の導入 以上の議論を踏まえ、本研究は、MCII を用いた、心理的暴力への予防的介入を行うことを目的とする。この目標を達成するために、本研究では、心理的暴力の予防に有効な行動を横断的研究と縦断的研究によっ

て検討する。その後、その行動の生起率を高めるために、MCIIによる介入を行う。

予備調査

目的

研究1の実施に先立ち、恋人間暴力の予防に対して有効であると考えられる行動を収集するため、自由記述調査を行う。

方法

調査参加者 恋人がいる大学生31名（男性14名、女性17名）を対象に調査を行った。

調査の内容 心理的暴力への予防行動を収集するため、「恋人をこと細かにチェックする」、「あなたを侮辱するようなことをしたり言ったりする」「したくないことを無理やりさせられる」を提示し、これらの暴力を予防するためにどのような行動が考えられるかを自由記述で収集した。

結果と考察

得られた自由記述について、KJ法を援用した分類を行った。その結果、「普段から相手に思いやりを持って接する」、「相手の考えを聞く」、「自分の意見や態度を主張する」、「相手の気持ちを考える」、「普段から相手を理解するように努める」、「嫌なことやダメなことは注意する」、「自分の感情を素直に伝えるようにする」などのカテゴリーが抽出された。

これらのカテゴリーは、相馬・浦（2009）の協調的・非協調的志向性に概念的に内包されるものと考えられる。相馬・浦（2010）の協調的・非協調的志向性は恋人間暴力の予防に有効であることが明らかにされている。そこで、本研究では、予防的介入のための行動として、協調的・非協調的志向性に注目し、一連の研究を行うこととする。

調査1

目的

予備調査で収集された予防行動は、協調的・非

協調的志向性に内包されるものであった。しかし、協調的・非協調的志向性を用いた介入的研究は行われておらず、また、協調的・非協調的志向性の中の、どのような行動が特に暴力を抑制するのかが十分に明らかになっていない。そこで調査1では、予防行動として協調的・非協調的志向性に注目し、どのような行動が心理的暴力の被害経験の少なさと関連するのかを検討する。また、協調的・非協調的志向性のそれぞれの行動を行うことがどの程度困難かについても検討を行う。

方法

調査参加者 株式会社マクロミルが保有するインターネットサンプルの中から、「現在恋人がいる、もしくは過去に恋人がいた」、「結婚経験がない」「30歳未満である」ことを条件に調査対象を抽出した。その結果、416名が調査対象となった。調査対象の内訳は、高校生の男性104名、高校生の女性104名、社会人の男性104名、大学生・社会人の女性104名であった。

調査内容 以下の尺度への回答を求めた。

(1) 恋人間暴力の被害：経験を尋ねるため、相羽・荒井（2012）や相馬・浦（2010）を基に作成した項目について、どの程度経験したことがあるかを4件法（「0：全く無い」から「3：5回以上ある」）で尋ねた。項目はTable 1に示した。

(2) 恋人間暴力に対する予防行動：恋人間暴力に対する予防行動として、相馬・浦（2009）の協調的・非協調的志向性尺度について、普段行っている程度を9件法（「1：全くあてはまらない」から「9：非常によくあてはまる」）で回答を求めた。

(3) 恋人間暴力に対する予防行動の実行困難度：(2)で用いた相馬・浦（2009）の協調的・非協調的志向性尺度について、それぞれの行為を普段行うことがどの程度難しいかを4件法「1：簡単である」から「4：難しい」で尋ねた。

Table 1 研究1のサンプルの心理的暴力と身体的暴力の被害経験

項目	経験率	
	男性	女性
1. いやがらせをされる	19.7%	14.4%
2. 約束を守ってくれない	37.5%	50.5%
3. 理由もなしに突然怒り出す	28.4%	15.4%
4. 相手からいやな呼び方で呼ばれる	12.0%	15.4%
5. デートでお金を払わされる	26.9%	22.6%
6. 相手の意に沿わないと無視される	20.7%	16.3%
7. 相手が怒ったかと思うと、その後急にやさしくなる	24.5%	16.3%
8. 人前で恥をかかされる	13.9%	9.1%
9. 怒鳴られる	13.9%	15.4%
10. 自分の好きなことをさせてくれない	24.5%	16.3%
11. 携帯電話の着信履歴やメールの内容を勝手にチェックされる	15.4%	10.1%
12. 他の人と連絡を取ることをいやがられる	28.4%	28.8%
13. 他の人と会うことを制限される	21.2%	18.8%
14. 1日に何回も電話やメールをして何をしているか聞かれる	18.8%	20.2%
15. 相談なしに二人にとっての重要な決定を相手がしてしまう	11.5%	11.1%
16. 侮辱するようなことを言われたり、されたりする	14.4%	18.3%
17. あなたに責任をおしつける	16.8%	11.1%
18. 目つき、顔の表情、動作や態度などであなたをおびえさせる	13.5%	11.1%
19. 相手の考えを押しつけられる	24.5%	21.2%
20. 非難されたり、悪口を言われたりする	22.1%	11.1%
21. 誰と会い、どこへ行くかなど、細かいことまで行動を管理される	14.4%	16.8%
22. 男はこうすべき、女はこうすべきというような役割を押しつけられる	13.5%	7.7%
23. 「別れる」と脅される	13.9%	12.5%
24. 殴られる、蹴られる	8.2%	5.3%
25. 突き飛ばされる	7.7%	4.3%
26. 物を投げつけられる	9.6%	4.8%

結果

恋人間暴力の被害経験 恋人から暴力の被害経験を項目ごとに算出した (Table 1)。その結果、心理的暴力の被害経験 (項目 1 から 23) の経験率は男性で 11.5% から 37.5%, 女性で 7.7% から 50.5% であった。一方、身体的暴力被害 (項目 24 から 26) の経験率は、男性で 8.2% から 9.6%, 女性で 4.3% から 5.3% であった。

協調的・非協調的志向性と恋人間暴力の被害経験の関連 協調的・非協調的志向性と恋人間暴力の関連について、項目ごとに相関係数を算出した。その結果、協調的志向性の「自分の知らない知識や情報を相手が持っていて、さほど関心を示さ

ない」や「相手が助けてくれても、素直に感謝の気持ちを表せないことが多い」、「相手が心の内面を打ち明けてくれても、自分はなかなか打ち明けようとししない」(いずれも逆転項目) は、心理的暴力と弱い負の相関を示した ($r_s = -.14 \sim -.11$)。

一方、非協調的志向性は、「相手が自分の悪口を言っている、つい許してしまう」(逆転項目) の項目が心理的暴力と弱い負の相関を示した ($r = -.15$)。

協調的・非協調的志向性の困難度 協調的・非協調的志向性を普段から行うことがどれだけ困難かを検討するため、項目ごとに困難度の平均値を算出した。その結果、協調的志向性の困難度は 1.62

～1.97であり、実行することが容易であると認知されていた。一方、非協調的志向性の困難度は2.34～2.56であり、実行することが困難と認知されていた。

考察

研究1では、協調的・非協調的志向性の各項目の心理的暴力の被害経験の関連、および困難度を検討した。その結果、協調的志向性は実行が比較的容易であり、心理的暴力の被害を抑制しやすいことが示唆された。一方、非協調的志向性は、実行が比較的難しいこと、相手の対応が冷たい場合に我慢しないこと、相手に悪口を言われた場合に我慢しないことが心理的暴力の被害経験を抑制することが示唆された。研究1では、心理的暴力の被害経験にのみ焦点を当てているため、研究2では心理的暴力の被害経験に加え、関係良好性や精神的健康との関連についても検討する。

研究2

研究2では、協調的・非協調的志向性の各行動が恋人間暴力の抑制や恋人との関係の良好性、個人の精神的健康との関連を検討し、どのような行動を心理的暴力への予防的介入に用いるかを決定することを目的とする。関係良好性は、接近コミットメントと回避コミットメント、関係満足度、恋愛関係における被統制感、アタッチメント・スタイル、投資量を扱う。なお、接近コミットメントは、関係維持に関わる報酬への接近目標と定義されるコミットメントであり、積極的に関係を維持しようとすることに特徴がある(古村, 2014)。回避コミットメントは、関係崩壊に関わる罰からの回避目標と定義されるコミットメントであり、関係を終結させるコストの高さゆえに別れられな

い特徴がある(古村, 2014)。恋愛関係における被統制感は、恋愛関係において自分の行動を恋人が統制・決定しているという感覚である(今野, 1999)。また、アタッチメント・スタイルには、アタッチメント回避とアタッチメント不安の二次元が存在する(Brennan, Clark, & Shaver, 1998)。アタッチメント回避とは、他者と親密になることに心地よさを感じず、心理的な独立を求める程度を反映した次元である。一方、アタッチメント不安とは、他者に見捨てられることを恐れる程度を反映した次元である。投資量とは、関係に自分の時間や資源をどの程度費やしているかの程度を表す(Rusbult, 1983)。

方法

調査参加者 株式会社マクロミルの保有するインターネットサンプルから、現在恋人がいる30歳未満で、かつ、結婚経験のない人を対象にサンプルを抽出した。その結果、1338名(男性526名、女性812名)が調査参加者として抽出された(Table 1)。調査対象の内訳は、高校生の男性62名、高校生の女性176名、大学生・社会人の男性464名、大学生・社会人の女性536名であった。また、2時点目の調査に回答した人は414名(男性176名、女性238名)であり、この中で関係が継続していた人は386名(88.4%)であった。研究2では、この386名を分析対象とした。なお、関係が維持していた414名はの内訳は、高校生の男性21名、高校生の女性59名、大学生・社会人の男性155名、大学生・社会人の女性179名であった。

調査内容 第1時点、および、第2時点に回答した人の中で関係が継続している人には、以下の尺度への回答を求めた。

Table 2 研究2のサンプルの心理的暴力と身体的暴力の被害経験

項目	経験率	
	男性	女性
1. いやがらせをされる	25.5%	21.8%
2. 約束を守ってくれない	42.8%	52.9%
3. 理由もなしに突然怒り出す	32.1%	16.4%
4. 相手からいやな呼び方で呼ばれる	15.0%	16.7%
5. デートでお金を払わされる	31.6%	29.2%
6. 相手の意に沿わないと無視される	31.0%	19.0%
7. 相手が怒ったかと思うと、その後急にやさしくなる	26.4%	20.6%
8. 人前で恥をかかされる	18.3%	12.8%
9. 怒鳴られる	18.3%	22.8%
10. 自分の好きなことをさせてくれない	32.1%	19.5%
11. 携帯電話の着信履歴やメールの内容を勝手にチェックされる	22.1%	16.9%
12. 他の人と連絡を取ることをいやがられる	30.2%	32.9%
13. 他の人と会うことを制限される	23.8%	26.1%
14. 1日に何回も電話やメールをして何をしているか聞かれる	21.7%	16.6%
15. 相談なしに二人にとっての重要な決定を相手がしてしまう	16.0%	11.2%
16. 侮辱するようなことを言われたり、されたりする	18.1%	18.1%
17. あなたに責任をおしつける	19.2%	17.0%
18. 目つき、顔の表情、動作や態度などであなたをおびえさせる	16.5%	19.1%
19. 相手の考えを押しつけられる	22.8%	23.3%
20. 非難されたり、悪口を言われたりする	20.9%	15.4%
21. 誰と会い、どこへ行くかなど、細かいことまで行動を管理される	23.2%	21.1%
22. 男はこうすべき、女はこうすべきというような役割を押しつけられる	12.7%	11.1%
23. 「別れる」と脅される	17.5%	13.1%
24. 殴られる, 蹴られる	11.2%	9.8%
25. 突き飛ばされる	9.7%	10.0%
26. 物を投げつけられる	12.9%	7.3%

(1) 恋人からの心理的暴力と身体的暴力の被害経験を測定するため、研究1で用いた、相羽・荒井(2012)と相馬・浦(2010)から作成した尺度について4件法(「1:0回」から「3:5回以上」)で回答を求めた。

(2) 恋人との関係の状態について測定するため、古村(2014)の接近・回避コミットメント尺度、古村・仲嶺・松井(1998)の投資モデル尺度邦訳版から関係満足度尺度、今野(1999)の恋愛関係における被統制感尺度、古村・村上・戸田(印刷中)が作成したアタッチメント・スタイルを測定する尺度であるECR-RS日本語版、関係への投資量を測定する3項目を用いた。いずれも7件法

(「1:全くあてはまらない」から「7:非常にあてはまる」)で回答を求めた。

(3) 協動的・非協動的志向性を測定するため、研究1と同じく、相馬・浦(2010)の尺度を用いた。調査参加者の負担を減らすため、7件法で回答を求めた(「1:全くあてはまらない」から「7:非常にあてはまる」)。

(4) 精神的健康を測定するため、中川・大坊(1985)によって邦訳されたGeneral Health Questionnaireの短縮版であるGHQ-12とAwata, Bech, Yoshida, Hirai, Suzuki, Yamashita, Ohara, Hinokio, Matsuoka, & Oka(2007)のWHO-5を用いた。GHQ-12は4件法、WHO-5は6件法で回答を求めた。

結果

恋人間暴力の被害経験と加害経験 恋人から暴力の被害経験率を項目ごとに算出した (Table 2)。その結果、心理的暴力の被害 (項目 1 から 23) の経験率は男性で 12.7% から 42.8%, 女性で 11.1% から 52.9% であった。一方、身体的暴力被害 (項目 24 から 26) の経験率は、男性で 9.7% から 12.9%, 女性で 7.3% から 10.0% であった。

協調的・非協調的志向性と恋人間暴力および関係良好生との関連の検討 協調的志向性と非協調的志向性の各項目と心理的暴力の被害経験の相関係数を算出した結果、協調的志向性は全ての項目で心理的暴力の被害経験と弱い負の相関を示した ($r_s = -.02$ から $-.09$)。また、協調的志向性の全ての項目は、接近コミットメントや関係満足度、投資量、WHO-5 と正の関連を示し ($r_s = .12 \sim .33$)、回避コミットメントや被統制感、アタッチメント回避、アタッチメント不安、GHQ-12 と負の関連を示した ($r_s = -.10 \sim -.46$)。

一方、非協調的志向性は、「相手の対応が冷たくても、我慢してしまう」と「相手が自分の悪口を言っている、つい許してしまう」(どちらも逆転項目) のみが心理的暴力の被害経験と負の関連を示した ($r_s = -.13$ と $-.09$)。また、「相手の対応が冷たくても、我慢してしまう」の項目は、接近コミットメントや関係満足度、投資量、WHO-5 と正の関連を示し ($r_s = .12 \sim .33$)、「相手の対応が冷たくても、我慢してしまう」と「相手が自分の悪口を言っている、つい許してしまう」(逆転項目) のどちらも、回避コミットメントや被統制感、アタッチメント回避、アタッチメント不安と負の関連を示した ($r_s = -.12 \sim -.28$)。

協調的・非協調的志向性と3ヶ月後の心理的暴力の被害経験の関連 協調的志向性と3ヶ月後の心理的暴力の被害経験との関連を検討するため、第1時点の心理的暴力の被害経験を統制した、第1

時点の協調的志向性と第2時点の心理的暴力の被害経験との偏相関係数を算出した。その結果、全ての項目で弱い負の相関係数が示された ($pr = -.05 \sim -.17$)。

同様に第1時点の心理的暴力の被害経験を統制した、第1時点の非協調的志向性の項目と第2時点の心理的暴力の被害経験の偏相関係数を算出した結果、「相手の対応が冷たくても、我慢してしまう」と「相手が自分の悪口を言っている、つい許してしまう」(逆転項目) のみが弱い負の偏相関を示した ($pr = -.07 \sim -.09$)。

考察

研究2では、協調的志向性と非協調的志向性の項目ごとに心理的暴力の被害経験や関係良好性、精神的健康の関連を検討した。その結果、協調的志向性の全ての行動は、心理的暴力の被害経験の少なさと関連し、関係良好性の高さや精神的健康の高さと関連していた。一方、非協調的志向性は、「相手の対応が冷たくても、我慢してしまう」と「相手が自分の悪口を言っている、つい許してしまう」(どちらも逆転項目) が、心理的暴力の低さと関連し、関係良好性の高さや精神的健康の高さと関連していた。したがって、これらの項目を恋人間暴力の予防的介入に用いることが可能と判断した。

研究3

研究3では、MCIIによる恋人間暴力への介入実験を行う。介入は研究1と2の結果を踏まえ、協調的志向性の「相手が助けてくれても、素直に感謝の気持ちを表せないことが多い」および非協調的志向性の「相手の対応が冷たくても、我慢してしまう」と「相手が自分の悪口を言っている、つい許してしまう」を取り上げる。いずれも逆転項目であったため、表現を「相手が助けてくれたら、素直に感謝の気持ちを表す」「相手の対応が冷

たいときには、我慢せずにそのことを言う」と「相手が嫌なことを言ってきたら、嫌なことを伝える」と修正した。

方法

調査参加者 関東のA大学に通う恋愛カップル23組を対象にした。

実験計画 介入 (MCII 群, 統制群) × 測定時期 (Time 1 : プレテスト, Time 2 : 2週間後, Time 3 : 1ヶ月後) を要因とする2×3の混合計画であった。MCII 群は13組, 統制群は10組であった。

手続き プレテストは、実験参加者およびその恋人のメールアドレスに、Eメールでweb上の回答ページへアクセスするURLを送り、自分の携帯電話やスマートフォン、PCでアクセスをし、回答するよう求めた。この際、恋人と一緒に回答することなく、自分一人で回答するよう教示した。

プレテストから1~2日後、MCII群の実験参加者は、実験室を訪れMCIIによる介入を行った。MCIIは、以下の三つの手順でおこなった。

第一に、実験実施者が10分程度、恋人間暴力とその予防についての知識啓発を行った。この際、研究1と2の結果に基づき、「相手が助けてくれたら、素直に感謝の気持ちを表す」、「相手の対応が冷たいときには、我慢せずにそのことを言う」、「相手が嫌なことを言ってきたら、嫌だと伝える」が、恋人間暴力の予防にとって有効な行動であることを伝えた。

第二に、このような予防行動を取ることができた場合、恋人との関係がどのようにポジティブに変化するかについて想像し、記述を求めることで心的対比を行った。具体的には、Houssais, Oettingen, & Mayer (2013) を参考に、ポジティブな変化を表すキーワード (例えば、「信頼」や「安心」など) をリストアップした後、そこから自分にとって重要な2~3個を選び、具体的な記述を求めた。

第三に、心的対比を行った後、先に述べた予防行動を取りにくくしている妨害要因を特定し、それらのリストアップを求めた。その後、これらの妨害要因を克服し、予防行動を取るための行動計画を「もしも××ならば、その時は〇〇する」の形式で記述し、頭の中で3回復唱するように求めた。

一方、統制群は、これらの介入の手続きを行わなかった。

プレテストから2週間後と1ヶ月後にプレテストと同じ手続きと内容で、実験参加者とその恋人にwebページの質問項目への回答を求めた。

1カ月後の質問項目への回答が終わった時点で、実験参加者に実験室に来てもらい、謝礼 (カップルにAmazonギフト券3000円分) を渡し、ディブリーフィングを行った。

調査項目 実験参加者とその恋人のどちらにも、以下の質問項目への回答を求めた。

(1) 心理的暴力の被害経験 : 研究1, 2と同じ項目への回答を求めた。

(2) 協調的・非協調的志向性尺度 : 研究2と同様に、相馬・浦 (2010) の尺度について7件法で回答を求めた。ただし、研究3では、自分がどの程度行っているか (自己評定) とともに、恋人がどの程度行っているか (他者評定) についても尋ねた。

(3) 関係満足度 : 金政・大坊 (2003) で用いられた関係満足度を尋ねる2項目を用いた。

結果

研究3はサンプルが少ないため、有意性検定ではなく、効果量で結果を判断した。MCIIの効果を検討するため、介入の対象とした予防行動について、第2時点から第1時点の得点を引いた得点 (以下、変化量1) と第3時点の得点から第1時点の得点を引いた得点 (以下、変化量2) をそれぞれ算出し、それぞれの得点をMCII群と統制群とで

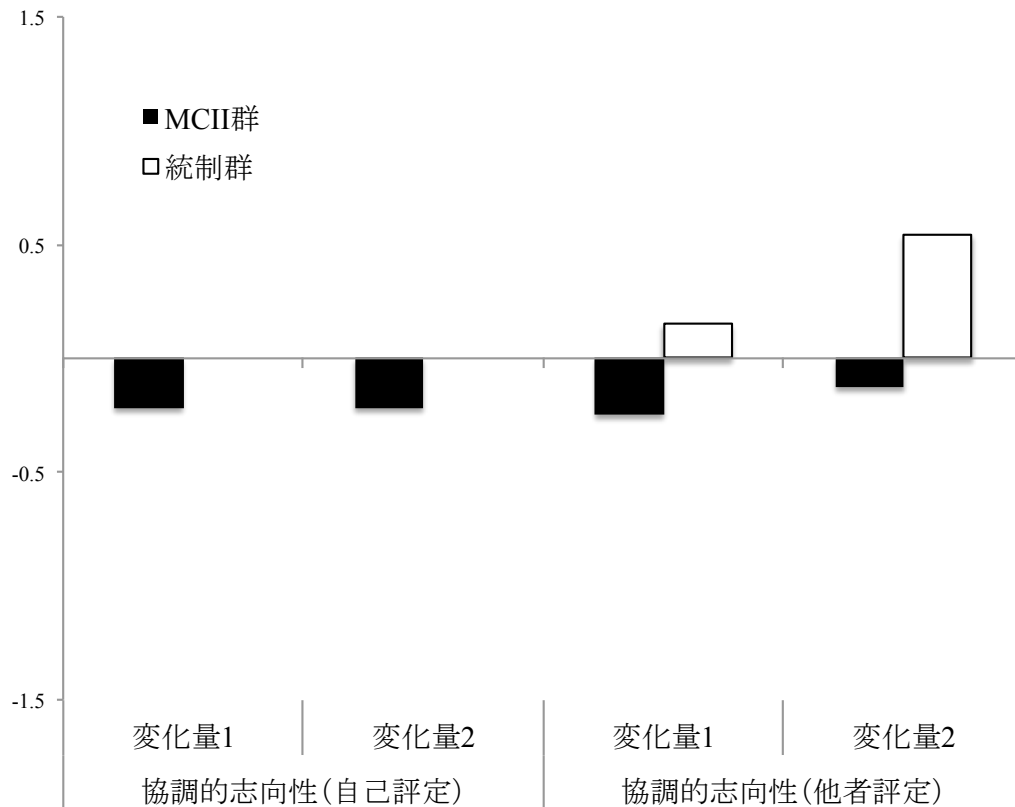


Figure 1 協調的志向性の変化量

比較した。

協調的志向性の変化量 Figure 1 に協調的志向性の変化量についての結果を示す。「相手が助けてくれたら、素直に感謝の気持ちを表す」において、変化量1は、MCII群が負の値を示し、統制群は変化しておらず ($M_{MCII} = -0.22, SD = 1.09; M_{control} = 0.00, SD = 0.71$), その差の効果量は $d = 0.25$ と小さな差であった。また、変化量2は、どちらの群も負の値を示しており ($M_{MCII} = -0.22, SD = 1.09; M_{control} = 0.00, SD = 0.71$), その効果量は $d = 0.25$ と小さな差であった。したがって、効果量は小さいものの、MCIIは、調査参加者の協調的志向性を低めていた。

恋人からの他者評定について比較した結果、変化量1は、どちらの群も変化量は負の値であり ($M_{MCII} = -0.25, SD = 1.17; M_{control} = -0.15, SD = 1.21$), その差の効果量は $d = 0.32$ と小さな変化量であった。また、変化量2は、どちらの群も変化

量は負の値であり ($M_{MCII} = -0.13, SD = 1.45; M_{control} = -0.54, SD = 1.33$), その差の効果量は $d = 0.33$ と小さな変化量であった。したがって、効果量は小さいものの、MCIIは、協調的志向性についての恋人からの評価を低めていた。

非協調的志向性の変化量 Figure 2 に非協調的志向性の変化量についての結果を示す。「相手の対応が冷たいときには、我慢せずにそのことを言う」において、変化量1は、MCII群の変化量が大きく ($M_{MCII} = 1.33, SD = 2.12; M_{control} = 0.85, SD = 2.12$), その効果量は $d = 0.33$ と小さな効果量であった。また、変化量2は、MCII群の変化量が大きく ($M_{MCII} = 1.25, SD = 1.28; M_{control} = 0.77, SD = 2.20$), その効果量は $d = 0.29$ と小さな効果量であった。

恋人からの他者評定について比較を行った結果、変化量1は、統制群の変化量が大きく ($M_{MCII} = -1.14, SD = 2.19; M_{control} = 0.62, SD = 0.96$), その効果量は $d = 1.22$ と大きな変化量であった。また、変

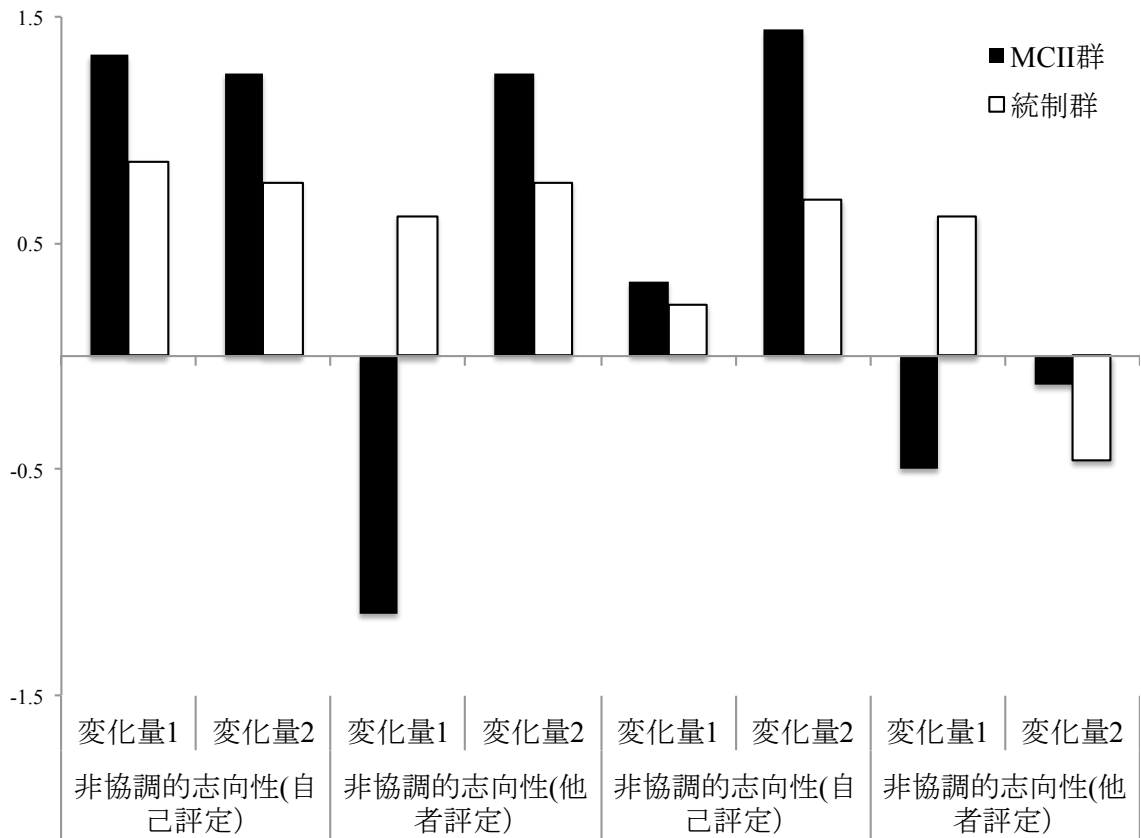


Figure 2 非協調的志向性の変化量

化量 2 は, MCII 群の変化量が大きく ($M_{MCII} = 1.25$, $SD = 1.28$; $M_{control} = 0.77$, $SD = 2.24$), その効果量は $d = 0.25$ と小さな効果量であった。

一方、「相手が嫌なことを言ってきたら、嫌だと伝える」において、変化量 1 は, MCII 群の変化量がわずかに大きく ($M_{MCII} = 0.33$, $SD = 1.22$; $M_{control} = 0.23$, $SD = 1.64$), その効果量は $d = 0.07$ と小さな効果量であった。また、変化量 2 は, MCII 群の変化量が大きく ($M_{MCII} = 1.44$, $SD = 1.67$; $M_{control} = 0.69$, $SD = 1.97$), その効果量は $d = 0.40$ と小さな効果量であった。

恋人からの他者評価について比較した結果、変化量 1 は, 統制群の変化量が大きく ($M_{MCII} = -0.50$, $SD = 1.12$; $M_{control} = 0.62$, $SD = 1.12$), その効果量は $d = 0.90$ と大きな変化量であった。また、変化量 2 は, どちらの群も変化量は負の値であった ($M_{MCII} = -0.13$, $SD = 2.80$; $M_{control} = -0.46$, $SD = 1.81$)。

以上より, MCII は, 非協調的志向性を高めるものの, 非協調的志向性についての恋人からの評価は低めていた。

心理的暴力の被害経験の変化量 Figure 3 に心理的暴力の被害経験の変化量についての結果を示す。心理的暴力の被害経験において、変化量 1 は, MCII 群の変化量が大きく ($M_{MCII} = -0.25$, $SD = 0.50$; $M_{control} = -0.03$, $SD = 0.24$), その効果量は $d = 0.11$ と小さな効果量であった。また、変化量 2 は, MCII 群は小さな変化量 ($M_{MCII} = 0.05$, $SD = 0.23$; $M_{control} = 0.11$, $SD = 0.15$), その効果量は $d = 0.33$ と小さな効果量であった。したがって, MCII は, 短期的には心理的暴力を減少させていた。

関係満足度の変化量 Figure 3 に関係満足度の変化量についての結果を示す。関係満足度において、変化量 1 は, MCII 群の変化量が大きく ($M_{MCII} = 0.39$, $SD = 0.84$, $M_{control} = 0.15$, $SD = 0.83$), その効

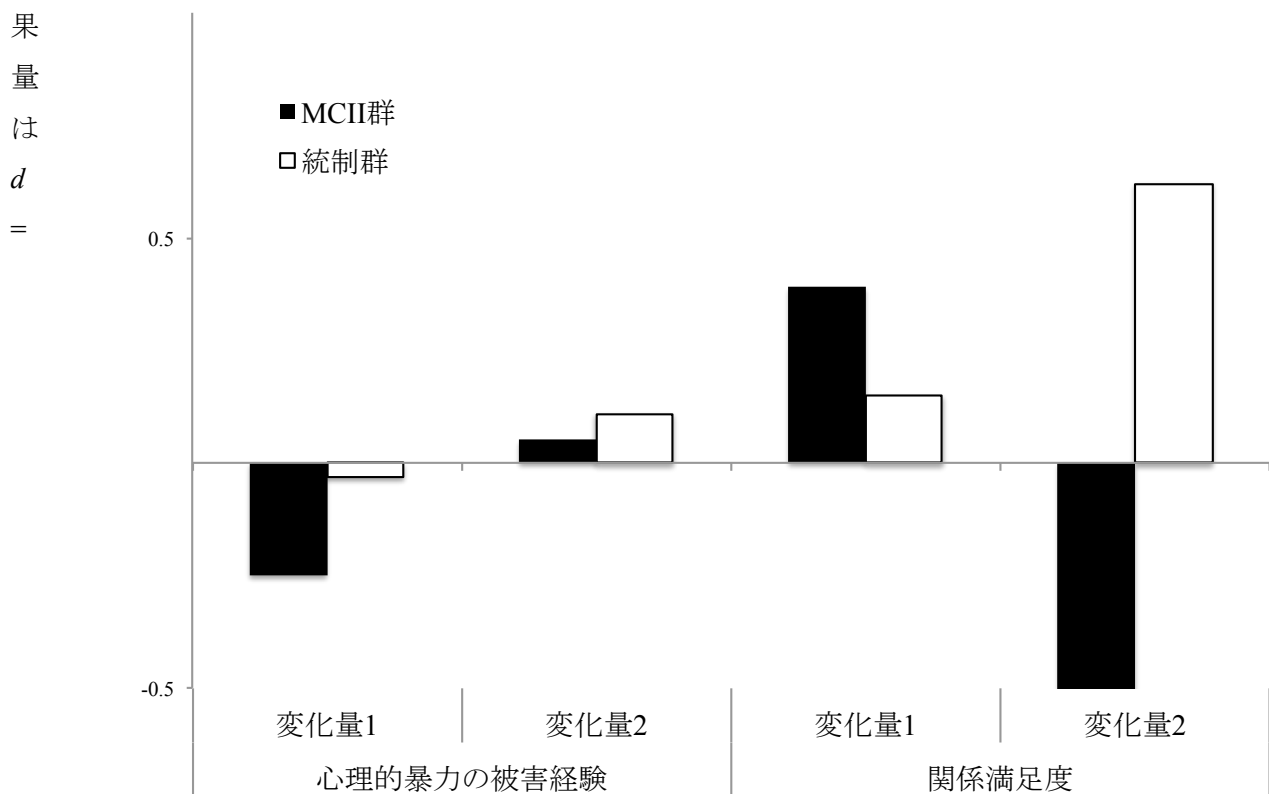


Figure 3 心理的暴力の被害経験と関係満足度の変化量

0.28 と小さな効果量であった。また、変化量 2 は、どちらも負の値を示し ($M_{MCH} = -1.22, SD = 1.52$; $M_{control} = -0.62, SD = 1.35$)、その効果量は $d = 0.43$ と小さな効果量であった。したがって、MCH は、短期的には関係満足度を高めていた。

考察

MCH による介入の結果は、以下のようにまとめられる。MCH による介入は、協調的志向性を増加させず、わずかではあるが減少させていた。一方、非協調的志向性を大きくはしないものの、増加させていた。加えて、心理的暴力をわずかではあるが、減少させていた。心理的暴力の被害経験は、その被害率が少ないことが研究 1 と 2 で明らかになっていることを考えれば、MCH による介入は、効果量こそ小さいものの、一定の効果があったと考えることができる。加えて、関係満足度については、短期的に関係満足度を高めるが、1 ヶ月後には元の水準に戻っていた。ただし、これらの結果につ

いて、効果量はいずれも小さな効果量を示すに留まっていた。

以上の結果を踏まえれば、MCH による心理的暴力への予防的介入は、恋人に対する非協調的志向性を増加させることで、心理的暴力の被害経験を減少させることに対して、その効果が必ずしも大きいとはいえないものの、一定の効果の有していると考えられることができる。

まとめと今後の課題

本研究の目的は、MCH による心理的暴力への予防的介入を提案し、その効果検証を行うことであった。効果測定の結果から、MCH による介入は、必ずしも効果が大きいとは言えないものの、非協調的志向性の増加や心理的暴力の被害の抑制に効果を持つと考えられる。

MCH の効果量が小さかったことは、本研究の問題点である。この原因の一つとして、参加者の動

機づけをどのように高めるかを今後考えていく必要がある。例えば、現在の関係が安定しているような対象者は、現在の恋人との相互作用を変化させることに対して抵抗感を感じる可能性があり、それが行動改善の動機づけが高まらなかった可能性がある。また、そのような関係において心理的暴力が生じていないのであれば、介入の必要性は小さいと考えられるため、本研究とは異なる心理的暴力への予防的介入を行う必要がある

また、本研究では、恋人間暴力については短い時間での知識啓発をするに留まった。知識啓発をより効果的に行うことができれば、MCII への動機づけも高まり、その効果が増す可能性があり、今後の改善が望まれる。

加えて、協調的志向性と非協調的志向性の交互作用についての注意が必要である。相馬・具志堅・上田(2007)は、夫婦を対象とした調査によって、協調的志向性が高い場合には、非協調的志向性が配偶者の暴力加害を抑制するのに対し、協調的志向性が低い場合には、非協調的志向性は配偶者の暴力加害を促進させることを明らかにした。この知見に基づけば、非協調的志向性のみを高めていた本研究の結果は、恋人からの心理的暴力を増加させる可能性がある。今後は、協調的志向性と非協調的志向性の交互作用を含めた検討が望まれる。

最後に、本研究の今後の展望を述べる。本研究で実施した MCII の所要時間は、45 分程度と比較的短いものであった。そのため、MCII は、高校や大学の授業で行うことが可能であると考えられる。今後は、MCII の手続きの改善とさらなる効果検証を行うとともに、知識介入や目標形成を含めた心理的暴力の予防的介入のカリキュラムを作成し、体系的な予防的介入へと発展させていくことが望まれる。本研究で得られた知見の実践的意義を高めるためにも、カリキュラム作成を含めた検討を行っていく必要がある。

引用文献

- 相羽美幸・荒井崇史 (2012) . 交際相手からの暴力 (Dating Violence) 被害経験尺度の作成, 日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 195.
- Arriaga, X. B., & Capazza, N. M. (2011) . The paradox of partner aggression: Being committed to an aggressive partner. In P. R. Shaver, & M. Mikulincer, (Eds) . *Human aggression and violence: Causes, manifestations, and consequences*. Washington, DC: American Psychological Association. pp. 367-383.
- Awata, S., Bech, P., Yoshida, S., Hirai, M., Suzuki, S., Yamashita, M., ... & Oka, Y. (2007) . Reliability and validity of the Japanese version of the world health organization-five well-being index in the context of detecting depression in diabetic patients. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 61, 112-119.
- Baldwin, M. W. (1992) . Relational schemes and the processing of social information. *Psychological Bulletin*, 112, 461-484.
- Barthromew, K. & Cobb, R. J. (2010) . Conceptualizing relationship violence as a dyadic processes. In L. M. Horowitz & S. Strack (Eds.) *Handbook of Interpersonal Psychology. Theory, Research, Assessment, and Therapeutic Interventions*. John Wiley & Sons: New York. pp.233-248.
- Beydoun, H. A., Beydoun, M. A., Kaufman, J. S., Lo, B. & Zonderman, A. B. (2012) . Intimate partner violence against adult women and its association with major depressive disorder, depressive symptoms and postpartum depression: A systematic review and meta-analysis. *Social Science & Medicine*, 75,

- 959-975.
- Braithwaite, S. & Fincham, F. D. (2014). Computer-based prevention of intimate partner violence in marriage. *Behaviour Research and Therapy, 54*, 12-21.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson, & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment Theory and Close Relationships*. New York: Guilford Press. pp.46-76.
- Exner-Cortens, D., Eckenrode, J., & Rothman, E. (2012). Longitudinal associations between teen dating violence victimization and adverse health outcome. *PEDIATRICS, 131*, 71-78.
- Duckworth, A. L., Kirby, T. A., Gollwitzer, A., & Oettingen, G. (2013). From fantasy to action: Mental contrasting with implementation intentions improves academic performance in children. *Social Psychological and Personality Science, 4*, 745-753.
- Finkel, E. J. & Eckhardt, C. I. (2013). Intimate partner violence. In J. A. Simpson & L. Campbell (Eds.) *The Oxford handbook of close relationship*. Oxford: New York. pp452-474.
- Gollwitzer, P. M. (2012). Mindset theory of action phases. In Van Lange (Ed.) *Theories of social psychology*. Sage: Los Angeles. pp. 526-545.
- Gollwitzer, P. M. & Sheeran, P. (2006). Implementation intentions and goal achievement: A meta-analysis of effects and processes. *Advances in Experimental Social Psychology, 38*, 69-119.
- Houssais, S., Oettingen, G., & Mayer, D. (2013). Using mental contrasting with implementation intentions to self-regulate insecurity-based behaviors in relationships, *Motivation and Emotion, 37*, 224-233.
- Johnson, M. P. (2008). *A typology of domestic violence: Intimate terrorism, violent resistance, and situational couple violence*. Northeastern University Press: New England.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003). 青年期の愛着スタイルが親密な関係に及ぼす影響 社会心理学研究, *19*, 59-76.
- 古村健太郎 (2014). 恋愛関係における接近・回避コミットメント尺度の作成 パーソナリティ研究, *22*, 199-212.
- 古村健太郎・村上達也・戸田弘二 (印刷中). アダルト・アタッチメント・スタイル尺度 ECR-RS 日本語版の妥当性評価 心理学研究
- 古村健太郎・仲嶺 真・松井 豊 (2013). 投資モデル尺度の邦訳と信頼性・妥当性の検討 筑波大学心理学研究, *46*, 39-47.
- 今野裕之 (1999). 恋愛関係における被統制感について 筑波大学心理学研究, *21*, 149-154.
- Murray, S. L. & Holmes, J. G. (2011). *Interdependence mind: The dynamics of close relationships*. The Guilford Press: New York.
- 内閣府男女参画局 (2012). 男女間における暴力に関する調査票
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本版 GHQ 精神健康調査票<手引き> 日本文化科学社
- 日本性教育協会 (2008). 「若者の性」白書 第七回青少年の性行動全国調査報告 小学館
- 日本性教育協会 (2013). 「若者の性」白書 第七回青少年の性行動全国調査報告 小学館
- Oettingen, G. (2012). Future thought and behaviour change. *European Review of Social Psychology, 23*, 1-63.
- Rusbult, C. E. (1983). A longitudinal test of the Investment Model: The development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of*

Personality and Social Psychology, 45, 101-117.

相馬敏彦・浦 光博 (2009) . 親密な関係における特別観が当事者たちの協調的・非協調的志向性に及ぼす影響, 実験社会心理学研究, 49, 1-16.

相馬敏彦・具志堅伸隆・上田真由美 (2007) . 強調なき非協調に効果なし (2) 一配偶者からの間接的暴力抑制に及ぼす協調的・非協調志向性の交互作用効果— 社会心理学会第 48 回大会発表論文集, 276-277.

相馬敏彦・浦 光博 (2010) . 「かけがえのなさ」に潜む陥落：協調的志向性と非協調的志向性

を通じた二つの影響プロセス, 社会心理学研究, 26, 119-130.

須賀朋子 (2015) . 中学生へのドメスティック・バイオレンス予防啓発に関する研究 風間書房

Ting, S-M. R. (2009) . Meta-analysis on dating violence prevention among middle and high schools. *Journal of School Violence*, 8, 328-337.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982) . 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.